第九三回　東洋文化講座（二〇一七年一〇月二七日）

満洲旗人の言語生活―清代の満洲語学習書から―

竹越　孝

はじめに

私の専攻は中国語学で、主に中国語の文法史を勉強しています。中でも元・明・清の時代における北京を中心とした北方方言、それは今の共通語の基礎となったものですが、その方言の変遷について調べています。特に関心があるのは、中国の北を取り囲むように分布しているチュルク系・モンゴル系・ツングース系、いわゆるアルタイ諸語と言われるものと中国語がどのように関わってきたのか、どのように接触して、それによって中国語がどのような影響を蒙ったのかといった問題です。

この分野に関しては、神戸外大におられた太田辰夫先生が一九五〇年代に「漢児言語」説という斬新な提案をされ、また橋本萬太郎先生もそれに関連して「言語類型地理論」という興味深い学説を立てられていますので、そういった先達の業績に導かれながら、日々考えているといったところです。元・明・清の北方方言を考察する上で私が主に使用するのは、元明代のモンゴル語文献、明清代の朝鮮語文献、そして清代の満洲語文献です。

私は歴史の専門家でも満洲語学の専門家でもなく、あくまで中国語学がベースですので、特に歴史方面の話は甚だ自信がなく、今回はむしろ専門家の方々に教えを乞いたいと思って参りました。私の近年の関心は、満洲語と中国語の対訳文献の中に反映した清代の北京語が時代とともにどのように変わってきたのか、ということです。

一　満洲旗人と満洲語・中国語

一・一　北京入城後の状況

まず、満洲旗人と満洲語・中国語の関わりということについてお話ししたいと思います。「満洲旗人」というものの定義は難しいところがあって、満洲八旗に属しているからすべて満洲族なのかというと、必ずしもそうではないのですが、ここではごく大まかに、北京の内城に住んでいて、もともと満洲語を母語としていた人達と考えておきたいと思います。ご存じの方も多いと思いますが、北京という都市はかつて城壁によって内城と外城がきっちりと仕切られていました。一六四四年、満洲族が山海関を越えて北京に入城すると、その翌年から内城の区画ごとに、どういった身分の人がどこに住むかということを決めました。北京の中心に位置する紫禁城（今の故宮博物院）を取り囲むように居住したのが満洲八旗で、蒙古八旗と漢軍八旗がその外側に配置されました。八旗の人以外が北京の内城に住むことは許されませんでした。

ところが、満洲族と漢族とは次第に雑居状態のようなことになっていきます。その原因として大きかったのは、城内の旗人と城外の民間人の間で当初は禁止されていた不動産売買が次第に有名無実化していったことです。旗人が土地や建物などを漢族に貸し出すということが頻繁に行われるようになって、内城でも母語の異なる民族が入り混じって暮らす状態になっていきます。そうすると、満洲族というのは人口比でいうと非常に少ないので、あっという間に漢文化に飲み込まれていく、つまり彼らの母語である満洲語を忘れていくという事態が起こったと思われます。

満洲人の母語喪失に関する歴史上の記載はたくさんありまして、特に皇帝がその状況を嘆くという姿が盛んに記録されています。ここではその史料を四つほど紹介します。

（一）康熙十年（一六七一）上諭

各部院及各省將軍衙門通事、原因滿兵不曉漢語、欲令傳達而設。今各滿州官員、即諳漢語、嗣後內而部院、外而各省將軍衙門通事、悉罷之。（『東華録』康熙朝巻十一）

（二）雍正六年（一七二八）上諭

値班侍衛及守衛護軍等、與其長晝閒坐、莫如學習清語。近見新挑之侍衛、護軍等、棄其應習之清語、反以漢語互相戲謔、甚屬不合。…嗣後各宜勉力、屏其習氣、以清語、拉弓及相搏等技、專心學習。（『上諭八旗』）

（三）乾隆六年（一七四一）上諭

近見滿洲子弟、漸耽安逸、廢棄本務。宗室、章京、侍衛等、不以騎射爲習、亦不學習清語、公所俱說漢語。…本年冬間、或明年春間查閱。其優等者、格外施恩。倘不學習、以致射箭平常、不諳清語者、定從重治罪。

（『高宗實録』巻一三八）

（四）嘉慶七年（一八〇二）上諭

従前、滿州盡皆通曉清文、…今滿州非惟不能繙譯、甚至清話生疏、不識清字。（『光緒會典事例』巻一一四七）

（一）は康熙帝の上諭ですが、以前は各衙門に通訳を置いていて、それは満洲人の兵士が中国語をわからないので置いたのだが、いま彼らがだいぶ中国語に熟達したのでそれを廃止する、と言っています。（二）は雍正帝の上諭で、護衛の満洲人たちは本来ちゃんと満洲語を勉強するべきなのに、今やその満洲語を捨ててしまって中国語でふざけ合ったりしているのは非常にけしからん、というようなことを言っています。(三)も乾隆帝の苛立ちを伝えています。最近の満洲の子弟は本務を忘れて遊んでばかりで、騎射の練習もしないし満洲語も学習しない、しかも公の場で中国語を話したりしている。そこで、今年の冬から来年にかけて調査を行い、ちゃんとできている者には褒美を与えるが、そうでない者は重罪に処する、といったことが書いてあります。(四)の嘉慶年間になると、以前満洲人は満洲語に通暁していたものだが、今の満洲人は翻訳ができないばかりでなく、満洲語すらおろそかになり、そもそも文字を知らない、と言っていて、ほとんど諦めの境地になっています。こういった背景があって、朝廷としてはいつも満洲旗人に満洲語の学習を迫るような状況だったわけです。

一・二一　翻訳科挙

満洲旗人の満洲語学習には科挙も関係していました。漢化の進行とともに、清朝は基本的には文書を「滿漢合璧」という対訳形式で出すようになり、そうすると「筆帖式」(bithesi)と呼ばれる翻訳官を養成しなければならなくなりました。加えて、科挙をやると八旗の子弟は江南の漢族の子弟にどうしてもかなわないものですから、いろいろな優遇措置を取って何とか八旗の者たちを役人として登用しようとするわけです。

そのための一つの方策が「翻訳科挙」で、満洲語（あるいはモンゴル語）の翻訳能力をもって取り立てるという制度です。これについては宮崎市定先生の『科挙』という本に詳しく述べられているので、そこから関連の事柄を取り出してみると次のようになります。

順治八年（一六五一）　翻訳科挙の施行
順治一四年（一六五七）同停止
雍正元年（一七二三）　同再開（郷試のみ）
乾隆四年（一七三九）　童試・会試を加える
乾隆二二年（一七五七）翻訳科挙停止
乾隆四三年（一七七八）同再開
乾隆五三年（一七八八）応試者少なく会試実施できず

嘉慶八年（一八〇三）　最後の会試

翻訳科挙の制度は順治八年に開始されるのですが、数年で停止され、雍正元年に皇帝の意向で再開することになります。この段階では童試・郷試・会試・殿試のうちの郷試だけで、合格者は翻訳挙人と称しました。翻訳科挙は学校制度とは連動しなかったので、単にその資格が与えられるだけでした。乾隆年間になると、童試に合格した者は翻訳生員、郷試に合格した者は翻訳挙人、会試に合格した者は翻訳進士、という通常の文科挙と同じような形に整備されます。これで一時的に受験者が集まったそうなのですが、すぐ集まらなくなりました。それは満洲旗人が満洲語に対する関心を失って、どんどん中国語を使った文科挙の方に参入していったためで、一八世紀末になると会試が実施できないという状態になり、一九世紀の初めを最後にこの制度は事実上消滅します。

考えてみますと、「満漢合璧」つまり満洲語と中国語の対訳であらゆる文書を公布するというのは基本的には朝廷のメンツを保つためです。しかも、翻訳科挙は人材を取り立てるというよりは、ほとんど満洲語を保護するために制度を作ったというところがありまして、それぐらい漢化のスピードは早かったのだろうと考えられます。

二　清代の満洲語学習書

二・一　満漢対訳会話書

それでは、既に母語が中国語にシフトしてしまった満洲旗人たちが、どのようにして学習対象としての満洲語に取り組んだかということを、満洲語の学習書を素材として紹介していきたいと思います。満洲語の学習書は会話書と文法書に大別されます。

満洲語と中国語が対訳の形で記されている会話書は、私が把握している限りでは刊本で八種類ほど残っています。その中にもサブグループがありますので、実際の数はもう少し多いことになります。以下、古いものから順に紹介していきます。

（一）『満漢成語對待』四巻（一七〇二？）

この書は現存する中では最も早い満漢対訳の会話書ではないかと思います。刊行年・作者ともに不明ですが、ドイツの満洲学者フックスは刊行年を康熙四十一年（一七〇二）、作者を劉順（？～一七六一）としています。その根拠は必ずしも明らかではありません。聽松樓刊本、先月樓刊本、雲林堂刊本、二酉堂刊本などが現存しています。

巻頭には満洲語だけの序文があり、「文法」という発音概説に続いて「雑話」という会話篇があります。これは「主」と「賓」、つまり主人と客人による対話を記したもので、

話者の別を表示しない会話書が多い中では、形式的にも珍しいものです。本文は独白体で、全十類に分けた三四八条の教訓が並んでいます。そのほとんどは、最近の満洲旗人の若者はなっとらんというようなお説教です。要するに、古老の言う教訓話（成語）を満漢対訳で示したものというのがこの書の趣旨のようです。対訳の中国語は非常に口語的で、清代初期の北京の言葉を濃厚に反映しているのではないかと思われます。

（二）舞格『滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話』（一七三〇）

『滿漢字清文啓蒙』という書は恐らく清代で一番広く流通した満洲語の教科書だろうと思います。なぜなら他に比べて版本の数が桁違いに多いからです。舞格（生卒年不詳）の著、巻頭に程明遠による雍正八年（一七三〇）の序があります。この書は全四巻ですが、非常によくできていて、巻一は音韻・文字編、巻二は会話編、巻三は文法編、巻四は語彙編といった構成を持つ、総合的な学習書と言えます。池上二良先生が版本の系統を三つに整理されましたが、それによると第一類は雍正年間の原刊本、第二類は乾隆年間の改訂本、第三類は巻二の会話編だけを取り出して単独で刊行したものとなります。

この書の巻二にあたる「兼漢滿洲套話」が会話編ということになります。構成は今の教科書と似た感じで、第一課、第二課、第三課…のように段落（条）に分かれており、全部で五十二条あります。第一条の部分は独白体で、これが序文に相当し、第二条からが会話体になります。各条の分量は均一ではなくて、第四十一条から第四十四条までの四話分はそれぞれ非常に長い会話を収録しています。

（三）常鈞『清話問答四十條』一巻（一七五八）、『滿漢合璧四十條』一巻（一八七八）

『清話問答四十條』は全四十段落、常鈞（?～一七八九）という満洲旗人が著したもので、巻頭に乾隆二十三年（一七五八）の序があります。先ほども申しましたように、満漢対訳の会話書類では話者の別を明示しないのが普通ですが、このテキストは「〇」の記号で話者が代わることを表しています。版本は一種類だけだと思いますが、東洋文庫蔵本では『射的説』という騎射の教本と同帙になっていて、乾隆帝が満洲旗人の務めを「国語騎射」と言ったように、やはり一に満洲語、二に騎射が必須の教養とされていたようです。

この書の改訂版を『滿漢合璧四十條』といい、巻頭に光緒四年（一八七八）の序があります。これは日本だと浦廉一先生の旧蔵書を収めた広島大学図書館の浦文庫にあります。

（四）『滿漢合璧集要』一巻（一七六四）

次は『滿漢合璧集要』ですが、これはなかなかの稀覯本で、日本では所蔵している機関が見当たりません。私が見

たのはロンドン大学東洋アフリカ研究学院（SOAS）所蔵の京口学刊本です。作者は不詳、巻頭に乾隆二十九年（一七六四）の序があります。

先ほどまで見てきた対訳会話書はすべて左右対訳、つまり左に満洲語、右に中国語があるという形でしたが、この書は上下対訳で、上の方に満洲語、下の方に中国語が書いてあります。全部で四十数条の会話を収めています。

（五）博赫『清語易言』一巻（一七六六）

その次は『清語易言』、言わば「満洲語早わかり」というような書名です。作者は蒙古旗人の博赫（生卒年不詳）、巻頭に乾隆三十一年（一七六六）の序があります。版本が数種類、日本だと東洋文庫と大阪大学図書館、中国だと中央民族大学図書館にありまして、それぞれ長さと内容が少しずつ違います。

この書は会話書の枠組を使ってはいるのですが、実質的に満洲語の文法・発音と正書法の概説になっています。冒頭の会話で満洲語学習の進み具合を問われて、それでは試しに alambi（告げる）という単語を活用させてみよう、という感じで、その活用と称するものが延々二三〇種ほども続きます。その他に、今で言うと母音調和に関する記述や、あるいは綴りと実際の発音のずれのようなことも書かれています。

（六）『一百條』系諸本

次から紹介するのは『一百條』の系統になります。この系統が面白いのは、同一内容のテキストが色々な言語で形式を変えながら発展していくことです。ここではとりあえず満洲語と中国語に関係するものだけを取り挙げます。最初は満洲語だけのテキストだったものが、満洲語と中国語の対訳版、モンゴル語と中国語の対訳版、満洲語とモンゴル語と中国語の三言語対訳版、さらにはそれがヨーロッパに渡って中国語の教科書になる、という具合に変遷を遂げていきます。以下に順を追って紹介していきます。

（六・一）智信『一百條』（Tanggū Meyen）四巻（一七五〇）

満洲語の Tanggū というのは一〇〇、Meyen というのは段落、条文という意味で、『清話百條』や『清字百條』と訳されることもあります。作者は智信（生卒年不詳）、現存の刊本は乾隆十五年（一七五〇）の刊行とされています。全一〇〇条に及ぶ満洲語だけのテキストですが、会話体だけでなく独白体の部分も含まれます。満洲語で記された本文の所々に中国語で傍訳、つまりわかりにくかったり重要だったりする単語についての逐語訳がついています。

（六・二）『清文指要』三巻、『續編兼漢清文指要』二巻（一七八九）

まず満漢対訳版が出ます。前半五十条を『清文指要』、後半五十条を『續編兼漢清文指要』と称し、全体の総称と

しては『清文指要』を用います。作者は不詳、今のところ、年代のわかる一番古いテキストは天理図書館にある乾隆五十四年（一七八九）の双峰閣刊本のようで、他に嘉慶十四年（一八〇九）の三槐堂重刊本や大酉堂重刊本などがあります。内容は『一百條』を満漢対訳の形に改めたものですが、各条の配列はだいぶ入れかわっています。『清文指要』の上巻は「字音指要」という発音と文法の概説、中巻と下巻に二十五条ずつ、『續編』は上巻と下巻に二十五条ずつという構成になります。

（六・三）『新刊清文指要』二巻（一八一八）

満漢対訳版である『清文指要』の改訂版が『新刊清文指要』です。現存するのは嘉慶二十三年（一八一八）の西安将軍署刊本で、上下巻に各五十条を収めています。この書は『清文指要』の満洲語と中国語に対して一定の改変を施したものですが、中国語について言えば、『清文指要』よりも口語性は後退していて、より正式な言い方を意識しているようなところがあります。

（六・四）富俊『初學指南』二巻（一七九四）

次に、モンゴル語と中国語の対訳版である『初學指南』が出ます。作者は富俊（一七四九～一八三四）という蒙古旗人で、この人物は松筠『百二老人語録』の漢訳者として知られています。乾隆五十九年（一七九四）の紹衣堂刊本が現存していますが、紹衣堂というのは富俊の号ですから、これは自家印本ということになります。もともと満洲文字というのはモンゴル文字を改良して作ったものなので、両者の字形は非常に似ています。この書は『一百條』を蒙漢対訳の形にしたものですが、段落が二つ増えて全一〇二条になっています。また、各条の配列も『清文指要』から再度大きく変わっています。

（六・五）富俊『三合語録』不分巻（一八二九）

その次には、『三合語録』という満洲語・モンゴル語・中国語という三言語の対訳版が出ます。これも同じく富俊の著で、巻首に道光九年（一八二九）の序があり、道光十年（一八三〇）五雲堂刊本、同二十六年（一八四六）炳蔚堂重刊本などが現存しています。一つの文が三行で構成され、左が満洲語、中がモンゴル語、右が中国語となっています。『初學指南』と同じく一〇二条です。栗林均先生によれば、『初學指南』よりも『三合語録』のモンゴル語訳の方が先に作られたのではないかというお話でした。

（六・六）威妥瑪・應龍田『問答編』二巻（一八六〇）

『一百條』の系列は、今度は中国語の教科書に生まれ変わります。中国語ローマ字表記の、いわゆる「ウェード式」で名高いトマス・ウェード（威妥瑪、一八一八～一八九五）は、一八六七年に最初の近代的な中国語教科書である『語言自邇集』を著しましたが、その前段階として『問答編』という中国語だけの会話書を咸豊十年（一八六〇）

に上海で出版しています。ウェードは中国語の教科書を作るに際して、当初良い材料が見当たらなかったようで、北京語を反映する口語的な資料を探していたところにこの『一百條』の系列が目にとまり、應龍田という中国人と協力してこれを中国語の教科書に作り変えたと思われます。全一〇三条ですが、段落配列の類似性からみて、本書が直接基づいているのは『初學指南』の中国語であろうと思われます。

（六・七）ウェード『語言自邇集・談論編百章』（一八六七）

『一百條』系列の最後のバージョンが『語言自邇集』になります。ロンドンで出版された本ですが、第一巻の「談論編百章」というのが先ほどの『問答篇』に修訂を加えた会話編で、第二巻にはその英訳と注釈も付されています。最終段階で段落数はまた一〇〇条に回帰します。

以上のように、本来は満洲旗人に満洲語を学ばせるためのテキストだったものが、いろんな方向に拡張していき、最後には外国人のための中国語教科書になるという数奇な運命をたどったのが、この『一百條』系列の会話書ということになります。

（七）宜興『庸言知旨』二巻（一八〇二）

『庸言知旨』という書名は、平易な言葉で大切なことを知るという意味です。作者である宜興（?～一八〇九）は清朝の宗室です。現存する刊本の巻頭には嘉慶七年（一八〇二）の序があり、嘉慶二十四年（一八一九）に刊行したという記載があります。なお、大阪大学図書館には五巻の鈔本があり、内容も倍近くあるので、現行の刊本はこの鈔本を圧縮して出版したのではないかと考えています。本文は会話体ではなく独白体で、『滿漢成語對待』と同じように、十二類に分けた全二四〇条の教訓話が並んでいます。

（八）『問答語』一巻（一八二七）

次が会話書としては最後ですが、『問答語』という書物です。非常に薄い本ですが、日本にはどうも見当たらないようで、私が見たのは大英図書館の所蔵本です。先ほどの『滿漢合璧集要』と同じように上に満洲語、下に漢語という形を取ります。内容は、「来たか」「来た」「座れ」「座りません」「ご飯食べたか」「食べた」「何碗食べた」「三碗食べた」「お腹いっぱいになったか」「お腹いっぱいになった」のように、一問一答形式の平易なものです。

満洲語会話書としては大体以上のようなテキストが現存しており、満洲語と中国語が左右対訳の形か、あるいは上下対訳の形で記されています。こうした会話書類は、いずれも対訳の中国語が非常に口語的だというところが大きな特徴で、恐らくはとっくに母語が中国語に乗り移ってしまった満洲旗人たち、もちろんバイリンガルも多かったと思うのですが、そういった人たちの言語を反映しているの

ではないかと思います。また中国語の端々に、満洲語が影響したと思われるような語彙や文法が見られることも特徴と言えます。

二・二　満洲語文法書

次に、同じく満洲語の学習書として文法書の方を紹介したいと思います。文法書とはいえ、今のように体系的なグラマーではなくて、「虚字」「字尾」「助語」「接字」などと呼ばれる満洲語の機能語、つまり語彙的な意味を持たず文法的な機能を果たす語彙を、例を挙げながら中国語で解説していくという趣旨のものです。文法書も見る限り七種類ほど現存しています。

（一）沈啓亮『清書指南・飜清虚字講約』（一六八二）

恐らく最も早い文法書と思われるのが『清書指南』の「飜清虚字講約」です。『清書指南』は沈啓亮（一六四五～一六九三）の著で全三巻、康熙二十一年（一六八二）の序があります。同じ著者による辞書『大清全書』の付録のような扱いになっています。この書の巻三「飜清虚字講約」は、満洲語の「虚字」六十七種を中国語で解説したものです。「飜清」というのは満洲語の文章を作ることを意味するので、中国語を母語とする人が満洲語を学ぶための教材ということになります。なお、後に出版される載穀『清文備考』（一七二二）の巻一である「虚字講約」は、まるきりこれを引き写したものです。

（二）桑額『滿漢類書・字尾類』（一七〇〇）

その次は『滿漢類書』です。『滿漢類書』という辞書は全三十二巻で桑額（?～一七一二）の編、康熙三十九年（一七〇〇）の序があります。「字尾類」というのはその最終巻の一部になります。『清語易言』のところで触れた alambi（告げる）の活用と同じように、満洲語 genembi（行く）に九十七種の「字尾」をつけて、その意味を中国語の文言で解説しているというものです。

（三）舞格『滿漢字清文啓蒙・清文助語虚字』（一七三〇）

会話書のところでも紹介しました『滿漢字清文啓蒙』という総合的満洲語教科書の巻三が「清文助語虚字」という一編になります。今でいうと格語尾、活用語尾と各種の接辞にあたる「助語虚字」九十九種について例を挙げながら解説した部分と、常用フレーズ一五四種の中国語訳を記した部分に分かれます。私の見るところでは、満洲語の文法書として最も充実した内容を持っているのが本書だと思います。

（四）富俊『三合便覽・清文指要』（一七八〇）

これは会話書のところで出てきた『清文指要』とは別物です。『三合便覧』の編者は『三合語録』の作者でもある富俊で、乾隆四十五年（一七八〇）の序があります。この書は満洲語とモンゴル語と中国語の三言語対訳辞書で、全

十二巻ですが、その巻頭に「清文指要」・「蒙文指要」というそれぞれの言語についての概説があり、「清文指要」の中に満洲語の語尾や接辞を解説した部分が見られます。用例は文言のものが主です。

（五）嵩洛峰『清文接字』一巻（一八六六）

だいぶ時代が下りまして、一九世紀の後半になっても満洲語の文法書は出続けます。『清文接字』という書は嵩洛峰（生卒年不詳）の著、同治三年（一八六四）の序と同五年（一八六六）の跋があります。光緒十四年（一八八八）刊の『新語清文接字』は本書の重刊本です。これまでの文法書と同様に、満洲語の語尾や接辞が、口語的な用例を交えながら解説されています。

（六）徐隆泰『清文字法舉一歌』一巻（一八八五）

さらに進みまして、『清文字法舉一歌』は徐隆泰（生卒年不詳）の著、光緒十一年（一八八五）の序があり、数種の版本が現存する模様です。この書がユニークなのは、満洲語の語尾や接辞の意味・用法、正字法、呼応関係などを七言の歌の形にしているところです。つまり、これを唱えて暗記すれば満洲語のシステムがわかるということだと思いますが、いかにも漢文化的な手法を用いている面白い文法書と言えます。

（七）萬福『清文虚字指南編』二巻（一八八四）

最後に、『清文虚字指南編』は萬福（生卒年不詳）の著、光緒十年（一八八四）の序があり、光緒二十年（一八九四）には『重刻清文虚字指南編』という重刊本が出ています。まだ詳しく調査できていませんが、刊行年は前後するものの、先ほどの『清文字法舉一歌』の七言句に例文を追加していったという趣の書のようです。

以上に紹介してきた清代の満洲語文法書は、いずれも現代の言語学から見ると素朴な記述の域を出ないのですが、当時の人々がアルタイ諸語の文法をどう認識して、それをどのように中国語で表現したかを知る上で貴重な資料と言えます。全体的に見て、名詞の格に関する記述は簡単なのですが、動詞の活用や各種の語形成についての記述は非常に詳細です。例えば動詞の活用については、「已然」「未然」「将然」といったタームを実質的な文法術語として用いて、今でいうテンス・アスペクト・ムードなどを記述していて、とても興味深い考察の材料が潜んでいるように思っています。

三　満洲旗人の言語生活点描

三・一　満洲語の学習について

三・一・一　序文に見る当時の言語状況

先ほどからの話のように、満洲旗人が満洲語を忘れてどんどん漢化していくという背景があって、それを何とか食い止めようという目的でこういった学習書の類が陸続と出

てくるわけですが、幾つかの学習書では序文の中で当時の言語状況について触れたものがあるので、それをピックアップしてみます。なお、これ以降に引用する学習書の記述はすべて満漢対訳なのですが、スペースの都合で満洲語の部分はすべて省略させていただきます。

（一）博赫『清語易言』序（一七六六）

清語者、我國本處之語、不可不識。但旗人在京與漢人、雜居年久、從幼即先習漢語、長成而後、始入清學讀書。學清語、讀書一二年間、雖識字曉話、清語不能熟言者。皆助語不能順口、話韻用字字意、無得講究之故耳、所以清語難熟言矣。愚將諸凡助語、皆於告訴之一句話上註出、又連話韻用字字意、作為一書。雖然淺陋不全、初學者、若先將此書熟讀、助語能順口、將話韻用字字意、知明已後、再讀他書、不但自能清語、即筆力亦有少補云爾。

これは『清語易言』の作者である蒙古旗人の博赫が当時の旗人の言語状況を描写したものです。特に興味深いのは、満洲語は必須の教養なのだが、旗人は北京で漢人と雑居すること久しく、幼い時からまず中国語を習って、長じてから初めて塾に入って満洲語を習い始める習慣になっている、と記しているところです。それに続けて、満洲語を学ぼうとしても、一、二年では文字は何とかわかっても、熟練して使うまでには至らないので、そこで私が満洲語についての重要な要素をまとめて一書をなした、と結ばれています。この序文は、乾隆中期の旗人の客観的な状況を記したものと言ってよいでしょう。

（二）『清文指要』序（一七八九）

清語者、乃滿洲人之根本、任憑是誰不會使不得。怎麼說呢？我等幸而生在盛世因是滿洲、若不會說清語、每遇人問及、就張口翻眼、比這個可羞的有麼？比這個可氣的又有麼？這上頭別說人家譏笑打趣、連自己的身分也丟了。豈不可惜麼？嘗見有一等人說起滿洲話來、分明是會的話恰乎不得、猛然止住及至想起來、早已臉上臊紅了的狠多。這沒有別的緣故、皆是平時未學、未習練着說之故也。又有可笑者、滿洲話還沒有影兒、就先學繙譯的。這等人何異北轅赴粵、煮沙要飯者乎？任憑漢文怎麼精奧、下筆時奈何清語短少、不合卯準、不成套數。雖學至老、難免庸愚名色。粗比即如蓋房、若無柁柱瓤等項、獨把匠人們叫來掣什麼做呢？惟有束手觀望而已。無有成房之理呀。即此看來、未學繙譯以前、當知先學清語為要。但清語甚繁、初學之人全行誦讀、幾時是了？因此我在裡頭走的空兒將老輩傳說、並我學記的、一句一句的集湊着、共集百條、教我族中子弟、以書名曰清文指要。此內貫串落脚、各樣說清語的方法、雖不周旋、大概眼前應用最緊要者俱備。學者果能專心致志反覆熟習、久

之自能隨意運用。任憑怎様説去無有不成話的、又何愁不會呢？但此書字句甚多、又恐讀者抄寫費力。故此付匠役刊刻、凡我等好清語的朋友公於同好。雖無益於通家、在初學未必無小補云。

先ほどお話しした通り、『清文指要』は『一百條』の満漢対訳版なのですが、現存する『清文指要』の序文は『一百條』の序文そのものではないようです。満洲語が正文ですが、対訳の中国語は『清語易言』と違ってだいぶ口語的です。

内容は最初からかなり怒っている雰囲気が出ています。満洲語というものは満洲人の根本である、我々は幸いにも満洲族として生まれたのに、もしも満洲語を話せずに、人から問われた時に口をあんぐり、目をぱちくりというような状況だったら、これほど恥ずべきことはあるか、これより怒るべきことはあるか、といった調子です。それに続いて、かつてある人は満洲語を話し始めたけれども簡単なことも言えなくてすぐ顔が真っ赤になった、これはふだん勉強してないのが悪いのだが、さらに笑うべきなのは、満洲語すら大してできないのに先に翻訳を学ぼうとする者で、これは全くの本末転倒だ、と言っています。そういった嘆かわしい状況なので、私は暇を見て先輩から聞いた話や自分が記憶している話を集めたところ、一〇〇条になったので、これをもって子弟に教える、と結んでいます。

こういった幾つかの記述から、当時の満洲旗人の置かれた状況が垣間見られて、また、もちろん建前の部分も大きいと思いますが、どういった意図で旗人の子弟のために満洲語の教材を編もうとしていたかがわかります。

三・一・二　満洲語学習を反映する会話

こうした会話書の中には、満洲旗人の満洲語学習を反映する会話というのが随所に見られます。内容的にも面白いものが多いので、『滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話』と『清文指要』の中からいくつか紹介してみたいと思います。以下、話者の別はA、Bで表します。

（一）『滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話』第四十一条

A阿哥、你是那旗的？　B我是正黄旗的。A是渾托和的啊、是牛彔的啊？　B牛彔上的。A在誰牛彔上？　B在常壽牛彔上。A姓什麼？　B姓周。A名子叫什麼？　B名子叫豊生哦。A誰的児子？　B頭等侍衛京屋機的児子。A幾歳了？　B十九歳了。A屬什麼的？　B屬龍的。A有戸中没有？　B有戸中。A誰的戸中？　B参領巴烟圖的戸中。A弟兄們都有麼？　B都有。A你哥ㇾ在什麼差事上？　B我哥ㇾ現在是藍翎子。A你兄弟什麼年紀？　B纔六歳了、還小呢。A生日是幾時？　B是正月二十五日。A你家在那裡住？　B在鼓楼前頭東邉住。A兵部員外郎呼哩阿媽是你什麼？　B是我哥ㇾ。A他父親是你什

麼？　B是我叔ㄛ。A親叔ㄛ麼？　B是、親叔ㄛ。A你馬歩箭都會射麼？　B會射歩箭、不會射馬箭。A你為什麼不學馬箭？　B因為没有馬、不曽學。A你拉ㄛ弓瞧。　B哦。噯呀、這个弓的墊子我也開不開、好硬啊。A若是那們着放下弓。念ㄛ檔子看。　B哦。A你讀了幾年書了？　B讀了三年了。A講過書了没有啊？　B開過講了。A不拘什麼書、你都能講得来麼？　B能的去處也有、不能的去處也有。倘若是細微之處、我就不能。A你在那个師傅的學裡讀書？B在趙師傅的學裡念。A這个趙師傅在那裡住？　B在我住的房子對門、那个大房子、就是他的家呀。A趙師傅的號児叫什麼字児？　B叫作拙哩阿媽。A現在什麼上頭？　B原是翰林苑的學士来着、因為身子有了殘疾、辭了學士了。A書上頭如何？　B好、無對手的高強。翻繹、講書、寫字、馬歩、弓箭、没有不會的。A管徒弟們也厳緊啊？　B阿哥、別提這个。小孩子們只一听見他的声児、魂都吊。A你也怕他麼？B噯呀這是什麼話？師傅就是父親一様啊、若不怕師傅、還怕誰呢？　A他家過的如何？　B也只是守着舊有的産業過罷咧。除此之外、他另有所得的去處、我不知道。A現在他跟前念書的徒弟有多少？　B現在有的想是勾着一百了。A你舊年也考来着没有啊？B考来着。因為念的寫的都差池、没拿名子啊。A原来情由是這様来着呢。我方纔問你的這許多話、都是試探你的本事的。看你所學的還去得、我明日告訴了大人們、必定送你的名子。或是教従考、或是即用、都定不得。這幾日裡頭、把你的馬歩箭、還是照舊的演習。念的寫的去處、也是照舊學。在家裡、別往別處去、瞧着傳去、如飛的跑了来。別悞下。B哦、知道了。

この一条は満洲旗人の年長者と若者の間で交わされた会話で、かなり長いものですが、若者に対するリアルな問いかけが延々と続いていくことに面白さがあります。

最初は個人的な事柄についてです。「お兄さん、君は何旗だね」、「私は正黄旗です」、「ホントホかね、それともニルかね」、「ニルです」、「誰のニルにいる」、「常寿ニルにいます」、「姓は何だね」、「周です」、「名前は何という」「フォンションゲといいます」、「誰の子だね」、「一等侍衛ギングジの子供です」、「何歳になった」、「十九歳です」、「干支は何だね」、「辰年です」といった具合に、根掘り葉掘り聞いていきます。

次に若者の弓術と満洲語の能力を試します。「君は歩射と騎射はできるかね」、「歩射はできますが、騎射はできません」、「どうして騎射を習わない」、「馬がないので習えませんでした」、「ちょっと弓を引いてみなさい」、「この弓は固くて引けません」、「では弓を置け、文書を読んでみなさ

い」、「はい」、「君は何年勉強した」、「三年勉強しました」、「本を読んだことはあるか」、「あります」、「どんな本でも読めるかね」、「できるところもあるし、できないところもあります」といった具合です。

続いて師匠の話題に移ります。「君はどんな師匠について勉強したんだね」、「趙先生のもとで勉強しました」、「その趙先生というのはどこにいる」、「私の家の向かいにあるあの大きい家が彼の家です」、「趙先生の号は何だね」、「チョリアマです」となって、その師匠に関する問答がひとしきり続きます。

最後に科挙の話になり、「君は去年も応試したかね」、「応試しましたが、読み書きがだめだったので取り立てられませんでした」といったところで種明かしになります。「私がこれまで聞いたのは全て君の能力を試すためだったんだよ」ということで、「君はなかなか見どころがあるから、大臣に君の名前を届けてやろう、一、三日のうちに使者が行くから、練習を怠らず待機していなさい」と若者に告げたところで一話が終わります。

(二)『清文指要』第一条

A聽見説你如今學滿洲書呢、狠好。清話呀、是咱們頭等頭要緊的事。就像漢人們各處的鄉談一樣、不會使得嗎？　B可不是什麼？我學漢書十年多了、至今並無頭緒。再要是不念滿洲書、不學繙譯、兩下裡都至於就擱了。因此上、我一則來瞧阿哥、再還有懇求老長兄的去處。但只難於開口。A這有什麼？有話就説、要是我能的事、你跟前我還辭嗎？　B我求的是、阿哥疼愛我、就是乏些兒也罷、得空兒求編幾條清話、教我念念。兄弟若能出息、都是阿哥恩惠啊。斷不肯忘恩、必然重報。A什麼這們説呢？你還是別人嗎？只説你不學罷咧、既然要學、我巴不得的叫你成人啊。報答是什麼話？嗐們裡頭也説得嗎？　B雖是那們説、我可感念不盡。就只是拜謝罷咧、説什麼呢？

『清文指要』の第一条もやはり満洲旗人の年長者と若者の会話です。「聞いたところでは最近満洲語を学んでいるそうだな、大変結構なことだ」と声をかけられた若者が、「私は中国語の本を十年余り学びましたが全く芽が出ませんでした、ここでもしも満洲語を勉強せず、翻訳も学ばなかったら、両方とも遅れを取ってしまいます」と答えています。それで、若者が遠慮がちにお願いしに来たのは、満洲語の教材を作って読ませてほしいということでしたが、年長者の方は、同じ旗人なのだから水臭いことを言うな、私が何とかしてやろうじゃないか、と応じています。

以上の二つの会話はもちろん満洲語で行われることが想定されており、また多少美化されている可能性も否定できませんが、当時の満洲旗人が置かれていた満洲語学習の状況と、彼らの言語に対する意識を反映しているのではない

かと思います。

三・二　満洲旗人の生活風景

三・二・一　北京内城の生活

満洲語会話書の類には、当時の北京の内城における生活風景を反映している内容が随所に見られます。旗人の社会生活史をめぐる史料としては、蒙古旗人・松筠の『百二老人語録』（一七九一）や『閑窓録夢』（一八二八～一八三五）などが有名ですが、これらの会話書も、それらに引けを取らないリアルさに満ちているので、いくつか紹介してみます。

（一）厚かましい男―『清文指要』第九十条―

他來的時候我還睡覺來着、驚醒了聽見、上屋裡有人高聲說話呢呀。誰來了、怎麼這樣的嗓子大、大罵是那個討人嫌的来了罷。去看時、可不是什麼？直挺挺的坐着、正有資有味的講論呢。自從以来總沒住嘴、怎長怎短的說着、吃了两頓飯、至到黃昏纔去了。漢子人家没事的時候、在人家裡坐到日落也受得嗎？把那裡忘了的事情說的、叫人腦子全疼。寡要是這樣的還罷了、不論什麼東西不可給他看見。一說搭上了眼、問也不問、撓着了早早的就拿了去。實在一背子寡知道要人家的東西、給人家的遭数兒說是沒有的。像這樣人的五臟怎麼長着、我實在不知道啊。都是你便易、你得嗎？天有眼睛啊、未必容他呢。

タイトルは浦廉一・伊東隆夫両先生による『一百條』訳注から取りました。この一条は独白体です。ざっとあらすじを追っていくと、寝ていて目が覚めたら、正房の方で高い声で話をしているのが聞こえる、誰が来たんだ、こんなに大きな声を出しやがって、恐らくあの嫌な奴が来たんだろうと思って見に行ったら、まさしくその通りで、それから奴はずっと口を閉じることなくあれこれお喋りを続けて、二度のご飯を食べて、黄昏時になってやっと帰っていった、と怒っていて、後は延々と愚痴が続いていきます。

実はこの一条に限らず、満洲語会話書の中には「一日中お喋りをした」というエピソードが非常にたくさん見られます。誰それの家を訪ねて、お喋りをして、ご飯を食べて、お酒を飲んでといった内容です。ということは、端的に言って当時の旗人たちは毎日ものすごく暇だったということを表しているように思います。

（二）変装した泥棒―『清文指要』第六十七条―

這幾日因為悶熱的上、把窓戸支着在外間夜裡睡覺来着。到了五更的時候、轉過去面望裡正睡着、耳朵裡聽見响了一聲。帶困睜開眼一看、頭前裡一個怪物站着呢。臉像紙一樣的白、眼睛裡流血、渾身雪白的、蓬着頭髮、在地下跳呢。我一見了大吃了一驚、哎呀、這個大罵就是鬼罷。看他怎麼樣的、密縫着眼看時、

不想他跳了一會、把箱子開了拿了好些衣裳、胳在胳肢窩裡、從窓戸裡出去了。因那個上、我猛然明白了、心裡想着、要是鬼也有拿衣裳的理嗎？站起来、抜出腰刀、給他個凑手不及、揚着赶到跟前一砍、哎的一聲、就撲通的跌在地下来了。叫了家裡的人們、點上燈看時、狠可笑。却原来是一個窃賊装作鬼来、嚇人来了的呀。

これも独白体ですが面白い話です。あらすじを見ていくと、最近暑いので窓を開けたまま寝ていて、夜中になって寝返りを打ったら、音が聞こえたので見てみると、何と前に化け物がいる、顔は紙のように白く、目からは血を流し、全身が真っ白、髪の毛もぼさぼさで、地面を飛び跳ねている。これは幽霊に違いない、と目を細めて見ていると、何とそいつは中に飛び込んできて、箱を開けて衣服を取り、腋に抱えて窓から逃げていった。そこで、もし幽霊だったらなぜ服を持ち逃げするんだと思って、立ち上がって刀を振り回したら、当たって倒れてしまった。家の人を呼んで見てみたら、何と泥棒が幽霊の格好をしていた、という話です。

これを教科書の一編とすることの意味がどこにあるのかと思いますが、先に見たような真面目くさった教訓話や満洲語学習のエピソードに混じって、こういったリアルで風変わりな話が所々に入っているのが満洲語会話書の面白さです。

三・二・二　優雅から堕落へ

最後に、こういった満洲語会話書の類に反映した旗人の生活面での変化を見てみたいと思います。特に『滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話』と『清文指要』（実質的には『一百條』の内容になりますが）のエピソードを比較してみると、「兼漢滿洲套話」の方ではまだ彼らの生活が優雅でエリート的なのに対し、『清文指要』になると徐々にその堕落した姿を見せるようになってきます。

（一）中庭での清談―『滿漢字清文啓蒙・兼漢滿洲套話』第四十三条―

A阿哥好麼？　B好。A阿哥、你的身体也好麼？

B好。A這一向你在那裡来着、竟没見你。　B我原正要来瞧阿哥来着、忽然被一件小事児拉扯住了、故此没得来。前日将ㇾ児的事情纔完了、昨日得了工夫、将説要来、又下起雨来了。阿哥、你是知道的、我雨衣毡褂子都没有、馬也没有、路児又濘。因其那們着、我又没得来。因為今日天晴了、我歩行特来瞧阿哥来了。A噯喲這様遠、為我勞動阿哥的駕、我如何當得起？真ㇾ的我感之不盡。　B豈敢。A阿哥、我在家裡獨坐、正狠悶的慌来着。尊駕来的、正合了我的主意、然而想念阿哥的心也得快活了。咱們弟兄今日既是會見面了、没有空ㇾ教你去的規矩。收什一盃薄酒、咱們二人對飲、坐着敘談一敘談。B阿哥、你既然這様

要疼愛我、我也没推辞的去處了、必定凑合阿哥的意思。只是無故騷擾、不合理。A豈敢。磕詩兎、在那裡呢？説教收什酒菜送来。C哦。A磕詩兎、這个地你怎麼不掃、桌子也不禪？你白ㇾ的在家裡作什麼来着啊？C我早已掃了来着。風儘着刮竟不住、再房門上又没掛着簾子、為什麼不這様臟呢？　A這个不知道理砍頭的奴才也有呢？還要強嘴麼？快着瞧酒去罷。C哦。A阿哥咱們稱着這个工夫、先把桌子挪在院子裡去坐着罷、這屋裡狠熱呀。B狠是。咱們若往外挪、那槐樹底下好。那裡乘陰凉児坐着舒服。A那裡不好、樹上的虫子多不住的吊。不如後院子房簷底下好。B若是那們着、就是後院裡罷。揔而言之、院裡比屋裡凉快。A自然的。況且屋子窄、人又多、坐久了頭眩心乱、我生来的也受不得熱。阿哥、今當春末的時候、萬物都發生了、正是遊山看水的好時節、我這个小書房院子、雖然不是名園勝境、也不亞如山林、正是吾輩隠居之處啊。B可不是什麼？　A噯呀、儘着叙談閒話、讓酒都忘記了。大小子、斟上酒。阿哥、你呵一鍾。B我呵過了、這个酒狠釅利害、我只呵了一鍾就醉咧。A説的是那裡話？纔舉鍾子、還未沾唇、就説醉了的理也有麼？你特撒謊的利害。B我不是撒謊、我原本不會飲酒、因為阿哥這様的疼愛我、纔呵一鍾罷咧。若在別處、斷然不呵。阿哥、倘若不信、問家人們便知。A你的話我都不信。會呵不會呵、我也不管。你只飲完了我的三盃酒、我饒了你。酒又不是毒藥、難道怕藥殺了麼？　B遮ㇾ、完了。這有何妨？這三鍾酒、就便醉死也罷、我呵。阿哥、你瞧、都呵乾過了。外頭也晚了、我去罷。A阿哥、在這裡睡一夜、明日再去罷。B罷呀、明日家裡有事、不去使不得。若不是這様、就在你家過一夜。阿哥、你倘或得了工夫、也往我們家裡去一遭児是呢。A必定去。B遮、生受了啊。A豈敢。吃了什麼了呢、道生受。遮、阿哥空去了。

これも長い一条ですが、例によって「お元気ですか」、「元気です」、「身体の調子は如何ですか」、「いいです」、「最近全然お見かけしませんね」、「会いに来ようと思ったのですが、瑣事に捕まってやっと今日来られました」といった挨拶から始まります。

この条には主人と客人以外に第三の登場人物がいて、それはCとした小間使いです。主人であるAは、なぜ部屋を掃除しない、テーブルも埃を払っていないじゃないかと咎めます。するとこの小間使いは、もうとっくに掃除しました、風が吹いていて、簾をかけなかったので汚れたんです、と口答えをします。そこで主人は更に怒って彼を叱りつける、という一段が挿入されており、まるで実際の場面を切り取ってきたようなリアルさが感じられます。

中盤からは、主人と客人が中庭に出て、大した家でもな

いけれども、清談といこうじゃないか、ということになって早速酒が出てきます。客人が、この酒は強いのですぐに酔っ払ってしまった、と言うと、主人は、酒というのは毒薬ではないのだから、薬で殺されることはあるまい、と更に酒を勧めます。酒をめぐるやり取りがしばらく続いた後、客人がもう遅くなったから帰ると言うと、主人はそれを引き止めてうちに泊まって行けと言いますが、最後は明日用事があるからと帰ることになります。

これを見ると、先ほどの話と重なりますが、人を訪ねていって、日がな一日四方山話に興じて、お酒を飲んで、という流れになっています。これが「兼漢滿洲套話」に見られる滿洲旗人の典型的な姿と言えます。

（二）飲酒の害毒―『清文指要』第九十九話―

看起你来、與燒黃酒上狠親啊。一時離不得、每逢喝酒、一定要乱醉如泥、站不住脚了的時候、纔撂開手。不是好事啊、料戒一戒児好啊。要是筵席上、可怎麼説不喝呢？有事故的時候可怎麼様呢？拿着喝些児有什麼？無事的時候、把他當一件事情、拿着鐘子不肯放稱賛起来、有什麼好處？只看見得罪老家兒、犯大罪、躭悞要緊的事情罷咧。實在没聽見會喝酒算學了那様本事、長了才學、叫人恭敬、成就了正経事情的呀。乱了性、傷了身子、是不好薬啊、長喝使得嗎？要是不信、你照着鏡子看看。鼻子全糟了、不是撂分児的人啊。不分晝夜的、如此往糟裡喝去、不是自己叫自己快着嗎？

ところが、『清文指要』になると様相が変わってきて、飲酒を戒めるという雰囲気が濃厚に出てきます。この一条は酒びたりの友人を諭しているといった雰囲気の独白ですが、白酒も老酒も好きな友人の不始末をさんざんなじってから、飲酒の害悪について延々と述べたてます。そして、酒というものは精神を乱し身体を傷つける悪い薬だと言っています。先ほどの「兼漢滿洲套話」では、酒といっても毒薬ではない、と言っていましたが、ここではもう毒薬になっているわけです。最後には、もしも信じないのなら鏡で自分の顔を見てみろ、鼻が全部朽ちているではないか、という脅しまで付け加えています。

こういった話から見る限り、十八世紀も後半になると、滿洲旗人は安定した優雅な生活というところから、無聊に苦しんで酒に溺れていく様がエピソードとして反映されてくるようです。

（三）賭博の戒め―『清文指要』第五十二話―

A哎呀、你怎麼了？噹們没見面、能有幾個月、怎麼這們快鬍子白了、有了老模様了。阿哥你別怪我的嘴直、風聞説、你如今頑起錢来、作了好些賬。要是真、可不是頑的呀、料収着些纔好呢。B這全是人編造的没影児的話。你要不信、可細細的打聽是呢。A什麼

話？自己走的自己不知道嗎？看起朋友們全議論你的来、你料有些児罷。頑錢啊、那是了手？要説是貪進去了、就説是有什麼能存得住呢？終久不遭罪戻、即将産業蕩盡、毫無所存之時纔歇手呢。像這様的、嗜們的耳躲裡聴見、眼睛裡看見的、雖然不多、只少也有一百還多。嗜們是知己的朋友啊、要是明知道不勧説、與誰什麼相干、豈説得是相好嗎？要是没有的事好罷咧、我打聴作什麼呢？

酒とともに賭博をめぐるエピソードも出てきます。この一条では、Aが数ヶ月の間にすっかり面変わりしてしまった友人Bに対して、聞くところでは賭博をやってだいぶ負債を抱えているらしいじゃないかと咎め、Bがそれは全く根も葉もない噂話だと否定すると、Aは賭博が如何に有害無益なものかということをまくしたてます。そして注目すべきは、賭博で身を持ち崩したケースというのは、少なくとも百を下らないぞ、と脅しているところです。ここからも、当時の旗人が賭博にかなり溺れていっている雰囲気が感じられるでしょう。

ちなみに、東京大学の漢籍コーナー所蔵の劉東山本『清文啓蒙』（一八二七）は「兼漢滿洲套話」の一バージョンですが、同じ帙の中に『戒賭十則』という本が入っています。内容は、賭博を戒めるための十箇条といったところで、ここからも旗人社会における賭博の蔓延が推し量れるように思います。

清代の満洲語会話書にはまだまだ多くのテキストが残されており、私が把握しているのはごくわずかな数のエピソードに過ぎませんが、それでもこうした会話書群を時系列的に眺めていくと、満洲旗人たちの言語と生活が、時代とともに少しずつ変わってくる様が見えてくるように思います。

おわりに

最後に本日のまとめとして、こういった清代の満洲語学習書の価値というものを考えてみたいと思います。

第一にはもちろん言語史料としての価値です。満洲語史の資料として、中国語史の資料として、これらは非常に大きな価値を持っています。私の専門領域からすれば、『紅楼夢』や『児女英雄伝』といった文学作品とは異なる、生の北京語に近いものが、こういった学習書の類に反映されていると考えています。

第二には言語生活史料としての価値です。実際の言語の使用状況であったり、あるいは人々の言語使用に対する意識であったり、そうしたものがこれらの学習書に反映されているように思います。言語政策史が上からの目線で捉えた言語使用の歴史だとすると、言語生活史は下からの目線だと言えるでしょう。

第三には社会史料としての価値です。歴史書ではこぼれ落ちてしまう生活者の歴史の断片が、こういった教材に残っていると考えられます。もちろん文字を読み書きする人たちは一般庶民とは違いますが、より庶民のレベルに近いところで起きたこと、見聞きされたものが、こういった学習書から見えてくるのではないかと思います。

本日はどうもありがとうございました。

（了）

参考文献

池上二良（一九九九）『満洲語研究』、汲古書院。

浦廉一・伊東隆夫（一九五七）「Tanggū Meyen（清話百條）の研究」『広島大学文学部紀要』第一二号。

太田辰夫（一九五四）「漢児言語について―白話発達史に関する試論―」『神戸外大論叢』第五巻三号、『中国語史通考』所収、白帝社。

岡田英弘（一九八〇）「征服王朝と被征服文化―八旗・北京官話・子弟書―」『月刊シルクロード』第四六号、『モンゴル帝国から大清帝国へ』所収、藤原書店。

栗林均・斯欽巴図（二〇一五）『「初学指南」の研究―十八世紀の口語モンゴル語―』（東北アジア研究センター叢書五五）、東北大学。

スチンバト（二〇一二）『「三合語録」における満洲文字表記モンゴル語の研究』、東北大学出版会。

竹越　孝（二〇〇七）『清代満洲語文法書三種』（KOTONOHA 単刊一）、古代文字資料館。

竹越　孝（二〇一五）『新刊清文指要―翻字と翻訳―』（KOTONOHA 単刊一〇）、古代文字資料館。

竹越　孝（二〇一六）『滿漢字清文啓蒙〔会話篇・文法篇〕―校本と索引―』（開篇単刊一六）、好文出版。

竹越　孝（二〇一七）『「一百條」・「清文指要」対照本（一）本文篇』（神戸市外国語大学研究叢書六〇）、神戸市外国語大学。

寺村政男（二〇〇八）『東アジアにおける言語接触の研究』、竹林舎。

橋本萬太郎（一九七八）『言語類型地理論』、弘文堂。

宮崎市定（一九四六）『科挙』秋田屋、『科挙史』（東洋文庫四七〇）、平凡社。

Fuchs, Walter von (1936) *Beiträge zur mandjurischen Bibliographie und Literatur*. Tokyo: Deutsche Gesellschaft für Natur-und Völkerkunde Ostasiens.